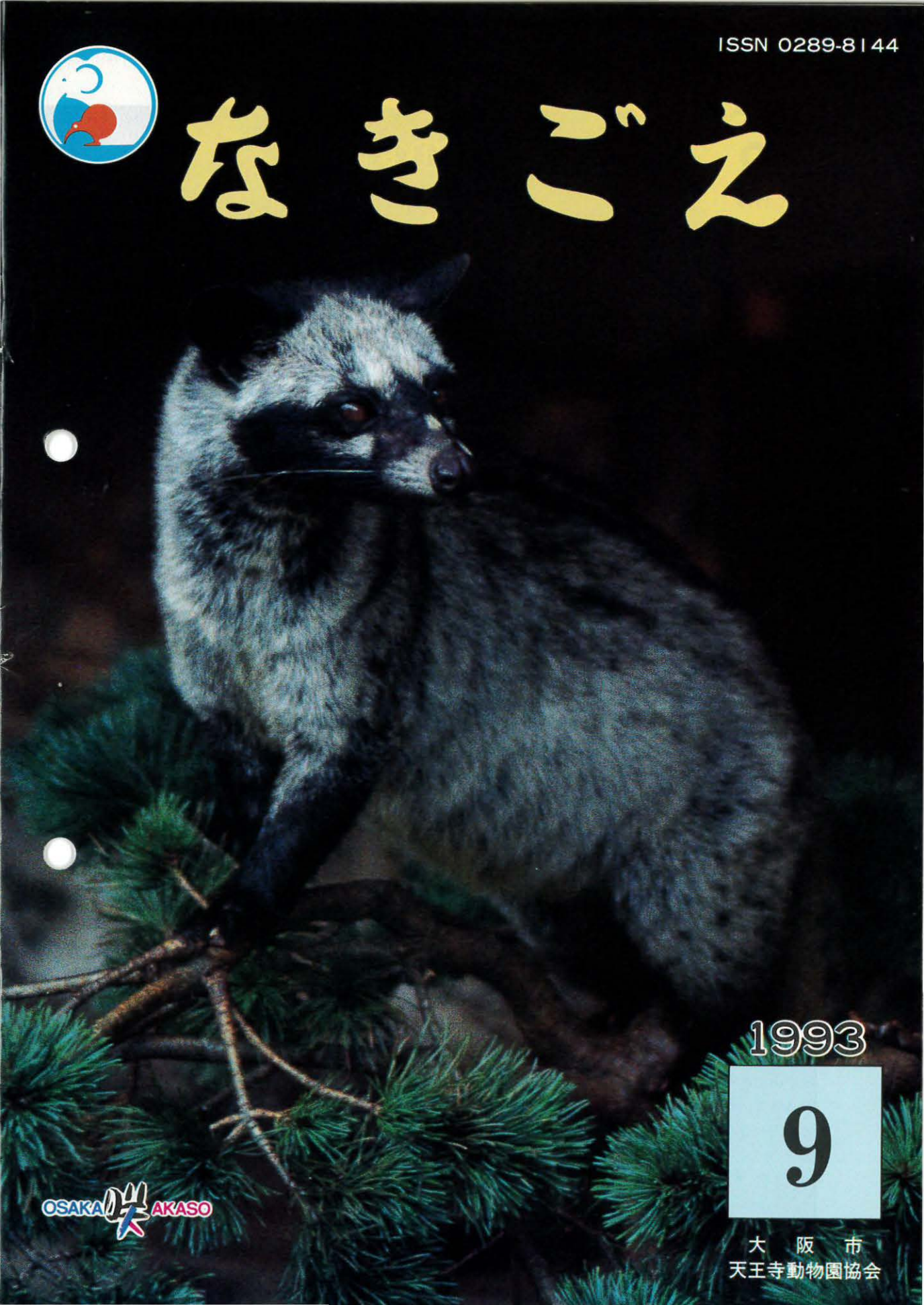
ISSN 0289-8144

なきごえ

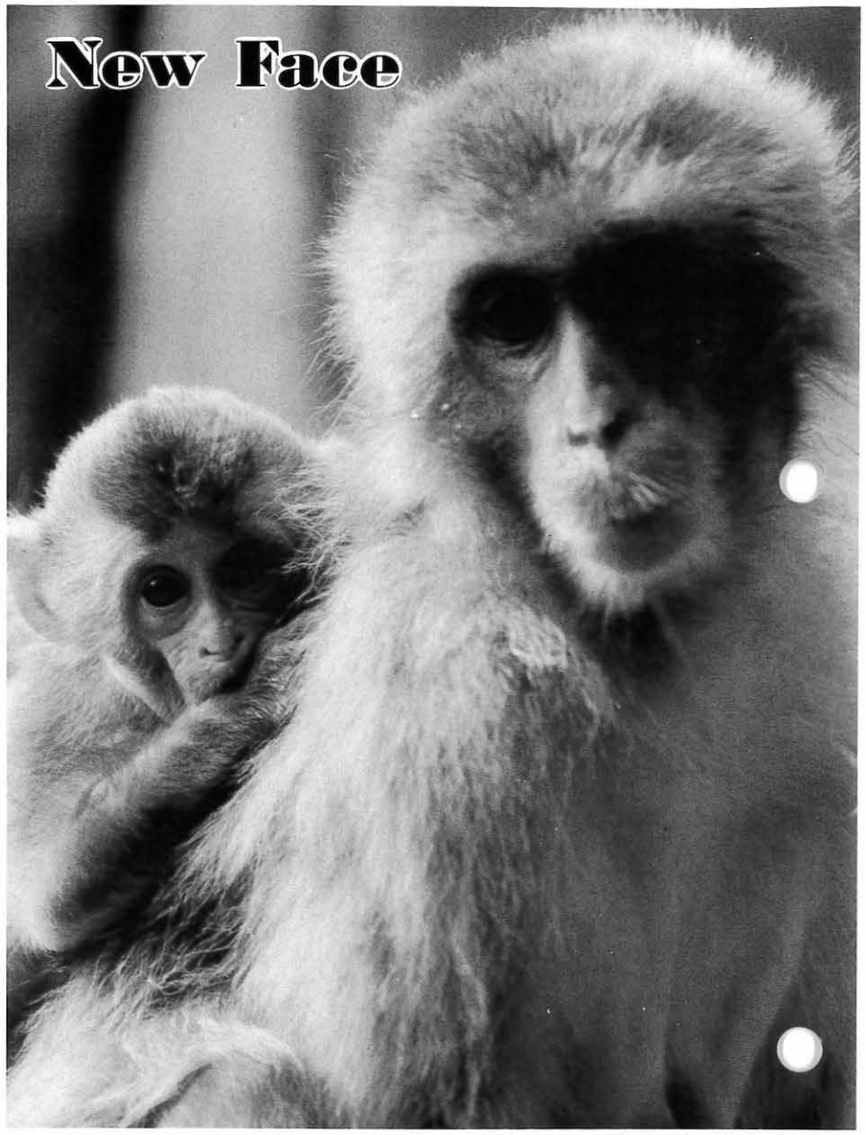


1993

9

大　阪　市
天王寺動物園協会

なきごえ
9
1993



（撮影：大野 尊信）

2 — New Face　ニホンザルの赤ちゃん
3 — 動物と私　風景のなかの鳥たち（江崎 保男）
カバーウォッチング　マレージャコウネコ
4 — 東京の自然と自然紹介人たち（小林　毅）
6 — アメリカの動物園（樽本　勲）
8 — グラフZOO
10 — 動物なんでも相談室
11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

マレージャコウネコ

ネコ目　ジャコウネコ科

Paradoxurus hermaphroditus

東南アジアに生息する夜行性の動物で、主に樹上で生活しています。果実や葉、昆虫、ミミズ、カタツムリ、ネズミ、小鳥、卵などを食餌しますが、特にヤシの果汁を好むので、英名は Palm civet といいます。

（撮影：前田　茂）

動物と私

風景のなかの鳥たち

江崎保男さん
（姫路工業大学・助教授　兼
兵庫県立人と自然の博物館・主任研究員）

机の上には電気スタンドとその時々必要なもの以外は何もないというのが好きです。ただ、双眼鏡だけはいつも机の端っこに置いています。こうしておけば、必要な時、気のむいた時にすばやく窓ごしに鳥の姿をみることができるからです。この6月にはうれしいことに、オオヨシキリが前の竹藪で1日だけ囀っていってくれました。

鳥の研究を始めて20年近くになりますが、オオヨシキリは私にとって特別の存在でした。この鳥が私に研究者としての基盤を提供してくれただけでなく、この鳥を相手にめぐらした思いの数々が日頃の私のものの考え方にも大きな影響をあたえていると感じるからです。琵琶湖のフィールドを離れて10年以上にもなりますが、いまだに夢で湖畔のアシ原の風景に出会います。しかし、その風景はけっして現実のものではなく、そこがはるか昔にきっとそうであったと思われる、だだっ広くて、ヨシの合間の水路を舟で調査地におもむく、そんな風景です。昔はこんなふうだったという地元の方々のお話が、私の頭のなかに架空の映像をむすんだのかもしれません。

子供のころは、やはり虫捕りでした。なかでも生駒山のヤンマと八幡男山のアゲハには心を踊らせました。八幡宮の参道で待ちうけるモンキアゲハは子供の眼には巨大なコウモリと映りました。標本を作ったこともありましたが、3～4箱をいっぱいにするのがせいぜいでした。生来、ものを集めることには執念を燃やせない質です。虫捕りはある夏の日が最後でした。例によって生駒山頂でヤンマ捕りに夢中になっていたのですが、飛んできたオニヤンマめがけてふった網の枠がその体に命中し、ヤンマは地上に落ちました。しめしめと思って近づいたのですが、落ちたヤンマの胸は無惨にもちぎれていました。なんとむごいことをしてきたものかと思って、虫捕りはそれっきりやめてしまいました。

鳥との出会いは、まだ虫捕りに熱中していたころです。理由は覚えていないのですが、ある日突然、鳥の図鑑がほしいといって父に心斎橋の駸々堂につれていってもらいました。図鑑の絵をながめては、高い山の上や深い森の奥で鳥たちが囀る姿を想像する日々が続いたように思います。

黒い詰襟服のなかに押し込められていた中学、高校時代には虫や鳥のことはすっかり記憶の片隅に追いやっていました。しかし、そんな6年間を終え受験浪人をしていた時に新聞でみつけた野鳥の会の一泊探鳥会の記事は、幼い日々に思い描いた鳥のいる風景を私のなかにまざまざとよみがえらせました。こうして、本物の鳥との出会いの道が開かれました。

「それぞれの鳥のまわりにどんな風景を描いてみせるか」、私が現在直面している課題です。思えば、子供のころ私の好んだ図鑑の虫や鳥は山や里、森や湖といったそれぞれの風景のなかにおかれていました。幼いころに抱いたあこがれと一生つきあっていくことになりそうです。

（えざき　やすお）

ニホンザルの赤ちゃん　サル目 オナガザル科

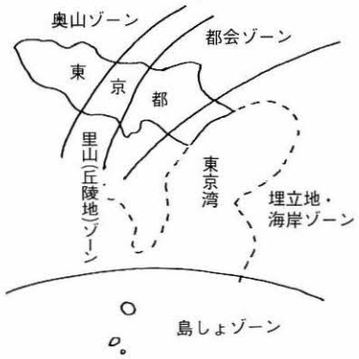
今年も4月～7月にかけて多くのニホンザルの赤ちゃんが生まれました。3年連続や2年連続で出産した母親もいて、合計16頭にもなりました。

東京の自然と自然紹介人たち

小林　毅
(株)自然教育研究センター

「東京の自然」といっても、多様です。ほとんどが開発されつくしたように見える都心にも、公園だけではなく大きな「みどり」の塊があります。皇居、明治神宮、新宿御苑を始め、大きな土地を有している駐日大使館にも比較的まとまった「みどり」が残っています。しかし、これらの場所は近年人の手によって作られてきた場所であることが多く、昔からの自然を感じさせてくれるのは多摩川の崖線に沿って、いわゆる「はけ」の自然が見られるくらいです。鳥瞰的に見ると線状になってしまいますが、かつての植生の名残が見られます。以上のようなことが、「東京には都心にも緑がある」と感じさせるゆえんなのでしょう。しかし、都心を離れるとまだまだ豊かな自然があるのも忘れてはいけない東京の大きな特徴でしょう。

◆東京全体を自然の様子や人々と自然との係わり方等に注目すると、「埋立地・海岸ゾーン」「都会ゾーン」「里山(丘陵地)ゾーン」「奥山ゾーン」「島しょゾーン」の５つのゾーンに分けることができそうです(図)。それぞ



れのゾーンにおける過去、現在における人と自然との係わりや、将来あるべき姿について比較すると面白いのですが、今回は誌面の関係から都会ゾーンと奥山ゾーンにおける活動について紹介しましょう。

◆どうしてこのように自然がどんどん失われていくのでしょう。最近、私は次のようなことを考えました。それは「私たちはあまりにも一方向的に自然を享受している」ということです。生きていくために自然は不可欠ですし、そこから様々な恵みを受けています。そういうことがあたりまえのことになっているので、一方向的に何かを頂くだけではなく、こちらからも何かを返してあげなくちゃいけないのではないかと考えたのです。何をしたらいいのか、というのはまだ具体的に答えがでていないのですが、とりあえずはお礼を言うなり、話しかけるなどしてはどうかと考えています。

◆ここでまた一つ問題点がでてくると思いませんか？　お礼を言ったり話しかけたりするのに、誰（どこのどんな自然）にどのようにすればよいのかわからない、ということです。相手である自然が、どこにどのようにあって、その後手元にくるまでの過程が分からない場合があまりにも多すぎるのです。下手をするとほとんどがそうなのではないでしょうか。断片的で、間接的で、あまりにも非連続的なつながりのない自然との係わり……。テレビでの自然を扱った放送やあまりにも自分の世界とかけ離れた場所での自然体験は、自らの生活と自然とのつながりを感じさせてくれるでしょうか？　もう少し身近な所での、自分の生活と係わった所での自然体験が本当は必要な気がして仕方ありません。

◆インタープリター登場 !!

このような自然との関係で失われている鎖を一つ一つつなげる作業を行うのが環境教育の大切な活動の一つだと思います。このような環境教育に係わる人をインタープリターと呼び、このような活動をインタープリテーションといいます。元々は、国立公園などの解説をする人のことで、インタープリテーションとは「話し手の感性を媒介にして、聞き手に新しい次元を開いてみせること」とされています。次に私が関係しているいくつかのインタープリテーションの例をお話ししましょう。

◆１　奥山ゾーンにて

（山のふるさと村のインタープリテーション）

山のふるさと村、ふれるクラフト教室

東京都の西の方にはまだまだ多様な自然が残っていて、秩父多摩国立公園にも指定されています。都心から一番近い国立公園、というわけですね。この国立公園は一都三県にまたがっていますが、東京都部分だけでも３つのビジターセンターがあり、訪れてきた人たちに自然公園の利用案内（インフォメーション）をしたり、利用指導（マナーなど)、自然や人文的な内容のお話(解説)をしたり、環境教育的な催しを行ったりしています。

具体的には、その時期に見られる自然を紹介しながら歩くガイドウォークや自然の素材を使っておみやげものづくりをするネイチャークラフト、夜の自然を体験するナイトハイクなど、訪れてきた人たちが自然の中で楽しく過ごせるような様々なインタープリテーションを行っています。自然公園に訪れて来る人たちは、まだまだ自然の中で何をしたらよいのかわからない、という人たちも多いので、このようなアクティビティーを行って、参加者と一緒に（短い時間ではありますが）過ごしながら、「私たちと自然とのつながり」についての話題へ引き込んでいくのです。山のふるさと村には、数人のレンジャー（インタープリター）と繁忙期には、十数人のシーズナルレンジャーが活躍しています。東京へお寄りの際に一度いらっしゃいませんか？

（山のふるさと村 0428(86)2551）

◆２　かもしかの会東京の活動

同じく奥山ゾーンには、野生の哺乳類が今なおたくさん生息しています。ニホンカモシカやホンドジカ、ツキノワグマ、イノシシ、ニホンザルなど、本州に生息する哺乳類のほとんどが奥多摩地域で確認されているのです。しかし、その分布や生態についてはまだまだ分からないことがたくさんありますし、第三次産業との摩擦もあります。

カモシカウォッチング

このような状況の下で、かもしかの会東京では野生動物の調査を継続的に行い、調査結果を皆さんにお知らせするなど地元の人たちとのつながりを考え、さらに野生動物を扱った観察会を実施するなどして野生動物の新しい価値観をつくりあげようと努力しています。野生の哺乳類は、見る人に大きな感動を与えるインパクトの非常に大きな動物です。かもしかの会では、哺乳類を素材として扱った環境教育の展開を考え、少しずつ実践しているところです。活動は観察会などに参加した人の中で関心の高い、熱心な人たちが中心に行っていますが、基本的にボランタリーの活動なので、時間を見つけたり、活動費用も自腹を切ったりと大変です。でも、みんな野生動物のインタープリターになろう？と一生懸命です。今後、奥多摩町に野生動物の観察センターを造ることも検討中で、活動の拠点ができれば、このような活動もますます広がりと深みをもっていくことでしょう。

（かもしかの会東京 0425(28)6595）

◆３　都会ゾーンにて(住民参加による自然調査)

都会には見るべき自然が少ないとして、自分の住んでいる所とは別の場所へわざわざ出かけて行って自然体験をすることが多くなっていますね。これ自体の全てを否定するわけではないのですが、これでは先に述べたように本当の、自分(の生活)と自然とのつながりを感じることはできないのではないかと思うのです。という訳で、身近な自然を住民参加で調査しよう、という方法が東京周辺の各地で、市区のレベルで行われつつあります。現在私は立川市の自然調査を市民参加の形で実施していますが、一番の難敵は、自然度が余り高くないために、魅力に欠ける、ということです。でも、インタープリターと一緒に調査をして歩いたり、観察会などに参加をすると、ごく身近な所にも興味深い自然がたくさんあることに気づきます。そして少しずつ仲間も増えてきました。調査の内容はヒキガエルの卵・成体、ウグイスの初鳴き、

立川市での夜の観察会(秋の鳴く虫、調査、観察会)

タンポポ、ツバメの巣、セミのぬけがら、秋の鳴く虫を始め、立川市に生息している可能性のあるタヌキ、キツネ、ムササビ、ネズミ、モグラなどの哺乳類調査などです（キツネとムササビはとうとう発見されませんでした)。

このような住民参加の調査は、調査全体をコーディネートする人が必要ですし、活動の拠点となる施設（博物館や郷土資料館など）があると活動がしやすくなります。また、単年度の予算による調査ではなく、長期に渡る継続調査を行うことが自然を把握する上でも、自然に関心を持つ人を増やす意味でも大切です。また、調査をして得られた結果をみんなでわかちあうことも大切です。立川市の調査は第１ステージの調査が一段落し、第２ステージとして、調査結果のまとめ（報告書と自然のガイドブックづくりの段階に入っています。

（自然教育研究センター 0425(28)6595）

◆このようにして、さまざまな場所で、その環境に応じた環境教育の試み、インタープリテーション活動が展開されつつあります。

今回は触れることができませんでしたが、丘陵地ゾーンは雑木林がかろうじて残り、かつての人と自然との係わりを考え、実際に活動をしていくのにとてもたくさんのプログラムが考えられる場所です。そして、実際に私たちの仲間もここで活動を始めています。今後また 東京の自然２ の依頼がありましたら、丘陵地ゾーンや埋立地・海岸ゾーン、島しょゾーンのことも紹介しましょう。

（こばやし　たけし）

アメリカの動物園

今春、ボストンで催された世界の水族館会議を機に日本動物園水族館協会が企画した海外研修旅行に参加してアメリカ東海岸の動物園を5ヶ所、水族館4ヶ所を見学してきました。また、単身カナダにも足を伸ばしてトロントとモントリオールのバイオドームも見学することができましたので、ここでは主に動物園の施設の印象等をお話ししたいと思います。

ワシントン国立動物園はスミソニアン研究所の所管する国立博物館の一施設です。面積が63haと広大な園域で、さらに1274haもあるという非公開の繁殖研究センターも併設されています。はじめに、ロビンソン園長のお話を聞き、いざ見学というときに雨が降り出し最悪。園は全体がなだらかな斜面になっており、丘側の順路と谷道の順路に分かれていますが、全体の獣舎の配置には特別の配慮があるとは思われませんでした。広いのと一つ一つの展示場が私にとって興味深いものが多くありましたので、とても時間が足りず、全園の⅓も見ることができなかったことが残念でなりません。アマゾニアという大きな建物には熱帯の植物を茂らせワニ、ヘビなど爬虫類からサル鳥まで展示しており立派なものでした。もっとも後で訪れたブロンクスのジャングルワールドやセントラルパークのトロピックゾーンなどの方が印象が深かったのですが・・。しかし、ここではゴールデンライオンタマリンを繁殖させ、野生復帰させる目的で飼育されていました。

ブロンクス動物園
ジャングルワールドのテングザルの展示

最近、チーターの放飼場が造られ、運動量を増やす装置もありました。また、小動物館や爬虫類センターなど種類の多さと展示の見事なことに圧倒されました。ゴリラの赤ちゃんも2頭おり、子供たちに大人気でした。

ボルチモア動物園は、フィラデルフィア動物園と並ぶ歴史の古い動物園で、市のほぼ中央部の広い丘になった公園の一角を占める緑の多い動物園です。特に目立つた獣舎はありませんが、子供動物園には力を入れているようで、教育活動が盛んな園でした。

ニューヨーク動物公園は面積106haという広大な広さと667種3374点という多くの展示動物を持った動物園で、世界一の動物園といえます。これまでの *New York Zoological Park (Bronx Zoo)*という園名を最近変更し、*International Conservation Park (Bronx Zoo)* となりました。つまり、国際的な種の保存公園ということで、動物園の最近の大きな目的の一つである“種の保存”を園の名称に強く打出して世間にアピールしています。

ボルチモア動物園
回転するカメの甲らが大人気

さして起伏のない園域ですが、高い木立ちや湖もあり、ところどころにニューヨークの岩盤も露出しており、これをうまく放飼場のバックに利用するなど自然の景観を生かしているなと感じました。

全体の展示の配置は、キリン、シマウマ、ダチョウ、ライオンなどのいるアフリカのエリア、レアやグアナコなどの南アメリカのエリア、ユキヒョウ、ホッキョクグマ、コディアックグマ、レッサーパンダそれにツルやカモのいる湿原といった北アメリカ、ヨーロッパ、北アジアのエリア(**HOLARCTICA**)とトラ、ゾウ、サイ、ガウル、アクシスジカなどのアジアのエリア(**WILD ASIA**)などに大きく分けられています。他に子供動物園や稀少動物のエリアなどもあり、半日の見学時間ではとても見きれませんでした。まあ4分の1くらいしか見ていないといってもいいほどで、誠に残念でした。特にモノレールに乗ってのみしか見られないワイルドアジアは5月から10月までしか公開していなかったため見られず、また、巨大な鳥類館(**World of Birds**)を見ることができなかったのもくやまれます。しかし、ジャングルワールドや夜行性獣館、爬虫館などお目あての施設は見ることができました。特にジャングルワールドは昆虫、サル、ヒョウ、ワニ、カエル、魚を熱帯のジャングルを再現し、飼育展示しており、感慨を新たにしました。当然、動物や植栽、空調、霧の発生装置など、裏方の管理にも興味がありましたが、時間に余裕がありませんでしたので、次回の楽しみにしたいと思いますが、その折は少なくとも2日間は見学にあてねばと思った次第です。

ニューヨーク・セントラル公園動物園は約60年前にできた動物園ですが、市立公園の中の小動物園なので、正規の動物園には数えられないできました。しかし、6年ほど前、ニューヨーク動物園協会が受託して動物園の展示の先端をいくような、都市型動物園に変貌し注目されています。

ここも動物園の名称を“セントラルパーク野生生物保存センター”(**Central Park Wildlife Conservation Center**)と改めています。園の中央にカリフォルニアアシカの大プールがあり、これを囲むように洋式庭園があります。そして、まわりに、ジャングルワールドを小さくしたような熱帯の動物の館(**Tropic Zone**)と温帯の動物のゾーン(**Temperate Territory**)それに、ホッキョクグマの水中遊泳や、アザラシのプールのある**Polar Circle**。あと一つは大きなペンギンの館の5つの展示場がありました。熱帯の動物の館ではハキリアリの展示が人気を集めていましたし、テナガザルとシロクロコロブスの展示がすばらしいし、ヘビやオニオオハシなどの熱帯鳥の飛ぶ温室は狭いながらも工夫がこらされていました。温帯のゾーンは、バーバリエイプ(サル)の島と背後の丘にはアライグマやビーバー、レッサーパンダ、水鳥の展示がありました。ホッキョクグマはその丘側からも見下すことができますが、ガラス越しに見る水中遊泳が人気を集めていました。ペンギン館は20～30mのパノラマ展示場で、水中遊泳も見られ、子供たちがガラスに張りついており人気のすごさを感じさせられました。岩などバックの景観も上手に造られていました。ホッキョクグマは雌雄2頭を展示していましたが繁殖は考えていないということでした。ゾウやキリン、サイなど大型の動物はブロンクス動物園にまかせておけるということで、天王寺動物園とは事情が違うようでした。さらにニューヨーク市にはステーテン島とクイーンズにも小規模な動物園があり、今秋にはブルックリンにもミニ動物園が誕生する予定とのことでした。

セントラル公園動物園
ペンギン館

フランクリン公園動物園はボストンにあり、州と都市圏との共同組織によって設立、管理され、ボストン動物園協会が運営に参加しています。30年程前、大規模な改造が行われ、基本計画から基本設計に至る過程は、その後の動物園新設・改造の手法のよい手本になったといわれていますが、目立った施設はあまりなく、唯一、アフリカ熱帯雨林(**African Tropical Forest**)と名づけられたものだけが印象に残りました。滝と流れのある広い屋外放飼場と屋内もかなり広く、モートをもった展示場に3頭のゴリラが飼育されていました。順路を進むとイボイノシシやボンゴもいましたし、クラハシコウなどの大きな鳥やマンドリルやワニなども見られ熱帯アフリカを屋内で再現するような展示がされていました。

他には外観は古めかしい中国風の建物ながら、中は新しい展示手法に改造された小鳥の家があったくらいで、大した印象のない園でした。

メトロ・トロント動物園はトロント市郊外にあり、面積287haという広大な敷地の動物園です。配置は大きく4ブロックに分れており、インド、マレーの地区にはインドサイ、ガウル、トラなどの他にオランウータンなどを屋内展示したインド・マレーパビリオンという大きなドーム展示館があり、植栽も多くとり入れていました。次に、アフリカ地区はキリン、アフリカゾウ、シロサイ、シマウマなど、おのおの広い面積の放飼場の集合がありました。また、アフリカパビリオンという大きなドーム内にはゴリラをはじめ爬虫類から鳥類、魚類まで寒さに弱い動物たちをバイオーム展示していました。やはり気象条件の厳しいこの地での展示なのでしょう。また、他にラマ、マーラ、ドールシープなどを展示したアメリカ区と、オーストラリア区などがあり、それぞれの地区にはパビリオンがあり冬期の加温を必要とする動物たちが展示されていました。

メトロトロント動物園
ドールシープ

園内が広いので、入園者の時間の都合に合わせて見学コースを選べるようになっていますが、モノレールやトラムカーも利用できるようになっていました。私は逐一見てやろうという気があったので歩け歩けで見て回わりましたが、それでも相当見落しの獣舎があったように思います。モリバイソン(アメリカバイソンの亜種)やトナカイ、クズリなどの動物舎は相当離れたところにありましたので見ることができませんでした。屋外の放飼場はどれも展示手法としてはあまり先進的ではありませんでした。各パビリオンは少し老朽化していましたが、展示は充実したものでした。ボランティアの説明員が入館者に親切な対応をしていたのが印象的でした。

園内の芝生のあちこちにこの時期野生のカナダガンが抱卵しており、カナダの動物園だなあーという雰囲気が出ていました。4月の終りでしたので、やっと樹々が芽吹きはじめたかなという頃で、これが新緑の頃はもっとよいだろうと思われました。

カナダでは、他にモントリオールのバイオドームを見ました。オリンピックの跡地に巨大なドームが建設されたもので、熱帯雨林、カナダの川沿いの森、海洋、それに極地の4つの展示からなり、すばらしい擬岩と本物の植物をバックに動物たちを見る施設で一見の価値があるでしょう。

以上、誌面の都合もあり、動物園の感想等をまとめましたが、水族館でもニューヨーク水族館の海獣とペンギンの展示場が訪問直前にオープンしており、展示手法に工夫がこらされ大変印象に残るものでした。

(飼育課：樽本　勲)

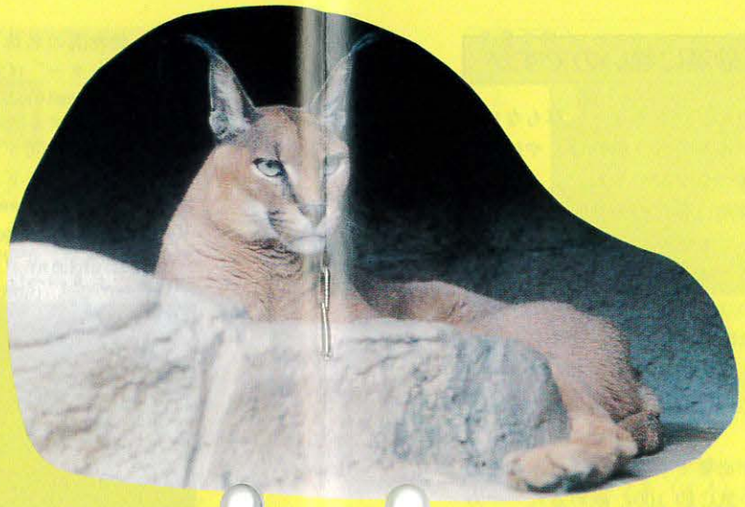
なきごえ29(9).1993

グラフZOO

ネコ科の動物たち

ネコ科動物の多くは美しい毛皮のために殺され減少しています。大はライオンから小はヤマネコ類まで、天王寺動物園で飼育しているネコの仲間を紹介しましょう。（撮影：大川光雄）

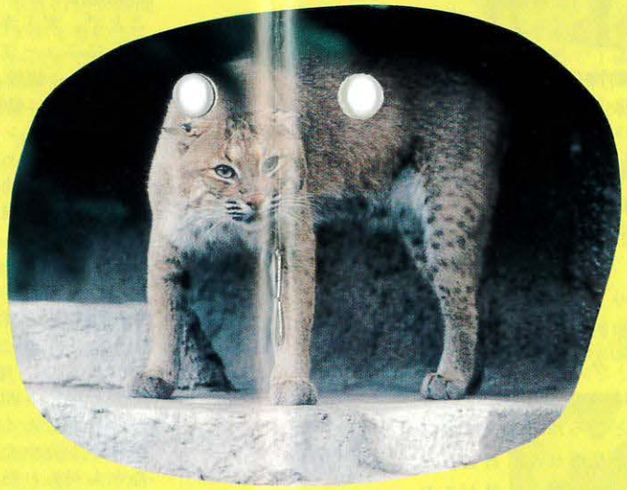
アジアゴールデンキャット
ヒマラヤから東南アジアの森林に生息しています。体毛は光沢があり、頬には黒色で縁取られたよく目立つ斑点があります。



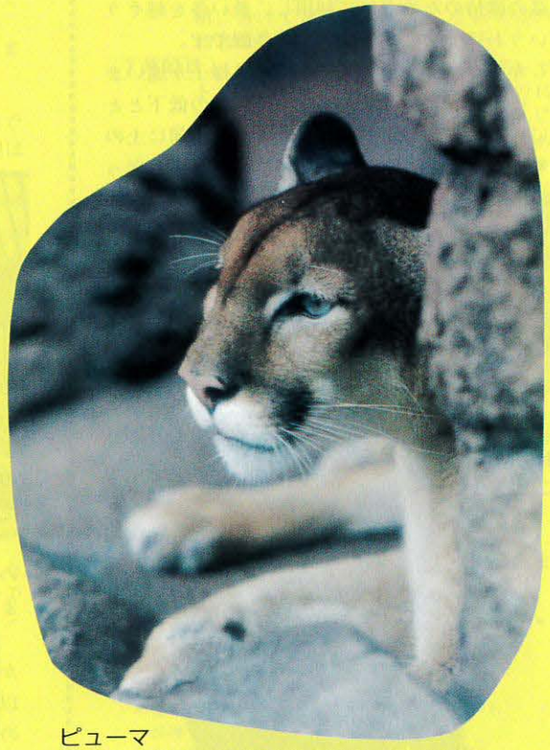
カラカル
インドからアフリカまで様々な環境に生息しています。足は長くスマートで、耳の先端には長い房状の毛が生えています。

ジャガー
ヒョウと同じような模様を持っていますが、ジャガーは南アメリカに、ヒョウはアジア、アフリカに生息しています。

ライオン
「百獣の王」として誰もが知っている動物です。子供には暗色の斑点がありますが、生後10ヶ月ぐらいで消えてしまいます。



ボブキャット
北アメリカの荒地や砂漠などに生息しています。全身に暗色の斑点があり、端を切ったような尾は特徴的です。



ピューマ
南北アメリカに広く分布しており、アメリカライオンとも呼ばれています。子供には頭、胴、足などに濃い斑点があります。

動物なんでも相談室

クマはなぜ冬眠するのですか

冬になると、外は寒いし、植物は雪の下に埋もれ、昆虫は越冬のためどこかに身を隠してしまうので、クマの食べ物が非常に少なくなってしまいます。このままでは厳しい冬を越すことは大変なことです。

そこでクマは、秋までに栄養（脂肪）を皮下にしっかり蓄え、雪が降ると岩穴や木の洞穴などにもぐりこみ、一冬中ひたすら寝て、蓄えた脂肪を体温の維持のためだけに利用し、長い冬を越そうというわけです。これがクマの冬眠です。

しかし、ヘビやカエルの冬眠とは様子が違います。ヘビやカエルは変温動物で外気温の低下とともに体温が著しく下がり、動けなくなる前に土の中や岩穴で完全に寝た状態で冬を越します。従って、春の暖かい日がくるまで起きることはありません。ところがクマは、変温動物のように著しく体温は下がらず、ときどき目をさまします。「冬眠」と区別して、「冬ごもり」と称することもあります。雌は「冬ごもり」中に子供を生み、育てます。

（飼育課：吉本昌俊）

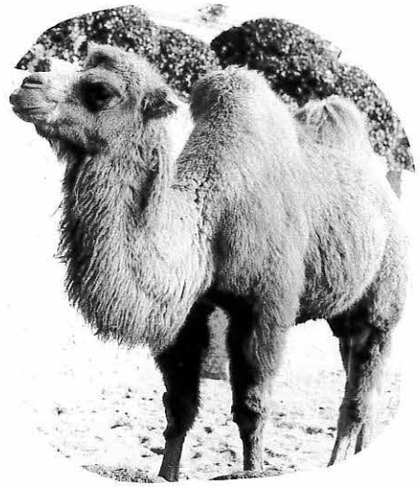
ラクダはなぜ砂漠に強いのですか

照りつける太陽のもと、水もない、草もない延々と広がる砂漠にぴったり合う動物は、やはり背中に大きなコブを持つラクダですね。

「ラクダはなぜ砂漠に強いのか？」、それは砂漠のまっただ中に置いてきぼりにされても、長期間耐えられるいろいろな体の機能をもっているからで、その一つがこのコブなのです。

このコブの中には脂肪がたくさん蓄えられています。何日間か何も食べなくても、脂肪をエネルギー源として砂漠の長旅をのりきることができるのです。

長旅といえば水が必要です。ラクダは水の飲みだめが出来ます（一気に約 100ℓ 飲める）。一方で、汗をかかず、乾いた糞をし、尿も少ないなど



体外への水分消費が少ない動物なので、多量の水を飲んだあとは、長期間、水なしでも耐えられるのです。

また、足の裏は幅広く肉厚で砂の表面を楽に歩くことが出来ますし、砂が中に入らないように鼻の穴を自由に開閉し、耳や目の縁には長い毛が密生しています。

さて当園には、フタコブラクダがいます。背中のコブだけでなく、大きな足の裏、鼻や耳、長いまつ毛をじっくりと観察してみて下さい。

エッ、お父さんのお腹にはいっぱい脂肪があるから砂漠で大丈夫だって！ところがラクダはコブ以外のところには脂肪はたまりません。お父さんのように体全体が脂肪太りしていたら、熱がこの脂肪にこもり、体温が上昇し、砂漠の旅は過酷なものになるでしょう。

（飼育課：吉本昌俊）

今月もおもしろ情報満載 ZOO DIARY

7月2日 ライオンのメス1頭を熊本市動植物園のご厚意により、寄贈していただきました。このライオンは今年1月生まれで、体重もまだ15kgと犬並みで、群れを作るべくすでに来園しているライオン（オス、メス各1頭）とは体格差がありすぎるため、もう少し時期を待って同居させる予定です。

7／5．6月に来園したホンドギツネ（オス）とキタキツネ（メス）の検疫が終了したので、それぞれの獣舎にて、ペア形成のための見合いに入りました。

7／8．タヌキの子供を1頭保護しました。

7／10．6月に来園したフタコブラクダの検疫が終了したので、メス2頭との見合いを開始しました。

7／11．ガビチョウが産卵しました。

7／12．ガビチョウが2卵目を産卵しました。外気温が25℃を越える日が続くようになったので、レッサーパンダを冷房のきく屋内で展示することにしました。

7／13．ブラックバックの赤ちゃんが続々と生まれています。

7／14．レアが1羽人工ふ化しました。

7月16日 シンガポール動物園との動物交換でチンパンジー母子が来園しました。母親は“プテリ”という名前で10歳。子供はまだ名前がついていませんが、今年12月で1歳になるオスです。しばらくの間は獣舎になれさせなければならないため、お目見えするのはしばらく遅れます。

7／18．キーウィ3羽の体重測定を実施しました。

7月18日 第98回動物のお話とスライドの会で「チンパンジーふれ愛ガイド」を、チンパンジー舎で実施しました。チンパンジーたちが道具を用いて、アリ釣りや木の実割りなどをするのを観察した後、参加者の皆さんに実際に木の実割りに挑戦していただきました。

7月21日 第19回サマースクールが始まりました。例年どうり対象は小学校4～6年生で行い、開催期間6日間で、2日ごと3組に分けて実施しました。なお今回の参加者は合計174名でした。

7月23日 「ホッキョクグマに氷柱のプレゼント」を行いました。これから猛暑の日を迎えるにあたり北国出身の動物たちに一時でも故郷の涼しさを味わってもらおうと、例年、大暑の日に実施しています。

7／25．キョンが1頭、生まれました。

7／26．夏期の日光浴のため、アルダブラゾウガメを爬虫類舎からカモシカ園の柵内に移動させました。同時に体重測定したところ97.1kgありました。

第19回サマースクールが終了しました。

7／27．ブラックバックのメスが1頭生まれました。

☆テレホンサービス：771－9999

☆お知らせ

- 敬老の日、ゾウの春子にリンゴのプレゼント
  日時：9月15日(祝)、午後1時～
- 動物園のおじさんのお話「長寿動物のお話」
  日時：9月12日(日)、午後1時～
- 動物愛護週間の行事
  期間：9月21日(火)～9月26日(土)

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B５変型判・オールカラー
定価600円

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞

B５変型判・オールカラー・各定価580円

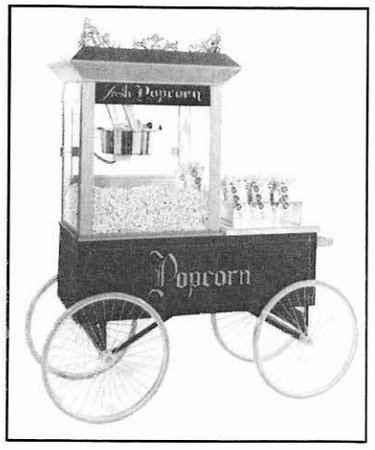
むし くらしとかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた

昆虫以外の小さな生き物を３２０種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表



マスダのポップコーン

マスダ　いつでもどこでもポンポンポン

〈営業品目〉　製造機械・保温機　他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

㈱増田食品　〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30　TEL (06)865－0165

オートフォーカスカメラに

フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店　☎341－8091
阪急三番街店　☎372－5031
OHVAC店（ギャレ大阪）　☎346－7606

動物の生態を描く唯一の文学雑誌

動物文學

昭和九年平岩米吉によって創刊

本誌は生態研究を基礎として動物文献を収集整理するとともに、シートン、ザルテン、バイコフ等の諸作家を紹介した本邦動物文学の母胎です。
〈研究・考証・記録・随筆・翻訳等を掲載〉
会費／年1,500円（切手72円・呈既刊号目次）

動　物　文　学　会
〒152 東京都目黒区自由が丘3-12-2　電話03(3717)1659・振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分（10本常備）

- 対　　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間／10日間
- 貸 出 料／無料（但し郵送料480円は必要）
- 申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

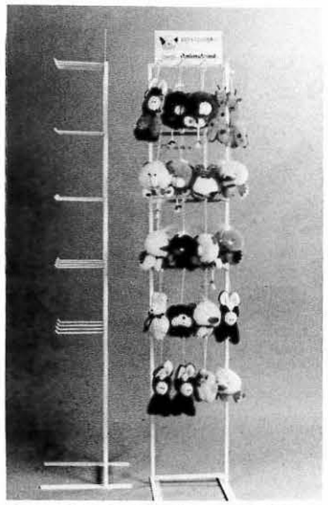
コアラテレホンカード（限定販売）
好評発売中　¥800（50度用）

天王寺動物園の本

入園の記念・手引に……

オールカラー
500円
園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

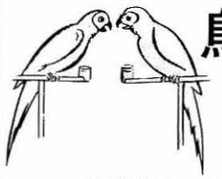


動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

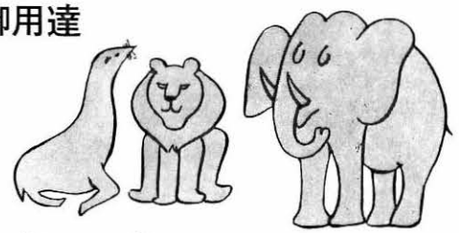
有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇４丁目５番22号
TEL：(06)704－８５８０
FAX：(06)704－８５６５



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- 医学実験用動物
- 宣伝用、テレビ用、貸動物
- 原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券250円

有限会社 **吉　川　商　会**

本　社　神戸市中央区中山手通３丁目11番４号　電話(078)221-8195㈹
飼育場　兵庫県小野市来住町１５１３番地

たのしい〝動物のお話〟は、ガイドマシン（動物説明機）で、どうぞ!!

園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

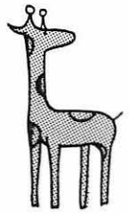
動物園内での
お食事、ご休憩は

動物園内……
中央売店
TEL 06-771-0973

お食事・飲もの・おみやげ

動物園内
南園売店 TEL 06-771-7110

園内でのお写真は…
動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機しておりますのでご説明に伺いました際は、よろしくお願い致します。

カラー写真 キャビネ1枚 **500円**

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
ＴＥＬ 06－856－7444

雪印

Our yogurt has fruity and rich texture!!

"生イキヨグール"と覚えてね。

しぼりたてミルクのおいしさが、生きている。

雪印 ヨグール

希望小売価格　130g／各120円　250g／各220円(税別)

HIJIRI-KOJIMA

一日
愉快に
たのしめる!!

◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種〝のりもの〟があります。

久竹娯楽株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ　1993年9月10日発行（毎月10日発行）第29巻　第9号　（通巻337号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所
発行人／大阪市天王寺動物園協会　土井良彦
印刷所／株式会社　松村善進堂　定価150円(送料共)　1年継続(12部)　1,650円(送料共)

〒543　大阪市天王寺区茶臼山町6—74
電話　大阪　(06)771—0201
振替口座　大阪3—3783

編集委員　中山良三郎／岩倉善樹／中尾啓一／樽本　勲／中川哲男／吉本昌俊／山根和弘／谷森　進／宮下　実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／竹田正人／永田健一／前田　茂／大野尊信／野口秀高／早川　篤／堀内智生／大川光雄／土谷正道／山元貞幸